

# 教育的援助ニーズに応じた学力向上実践研究

(実施期間 平成 18～19 年度)

研究代表者：学校教育講座・教授 小泉 令三

## 1 研究の目的

教育的援助ニーズの異なる児童生徒の学力向上について、教育計画マトリックスと個人別資料一覧表を用いた指導の有効性を検証する。

## 2 研究の組織

福岡教育大学：小泉令三・森田愛子（学校教育講座）

福岡市教育委員会：指導第2部部長・同課長・同主任指導主事（氏名は省略）

福岡市立小中学校：小学校3校，中学校1校

## 3 研究の概要

公立小・中学校4校を対象に、次のような指導手順の有効性を検証した。

- (1)校区ならびに学校の特徴を踏まえた学力向上における重点目標を設定する。
- (2)既習内容の定着度，個人特性，家庭環境などのゆえに教育的援助ニーズの異なる児童生徒について，個人別資料一覧表によりその個人差の実態を整理し，さらに各人の到達目標を設定する。
- (3)目標達成のための取り組みを具体化し，(2)の実態，目標とともに教育計画マトリックスに整理する。
- (4)実態，目標，取り組みはできる限りの数値化により，実施・達成状況を客観的に評価する。
- (5)上記(1)～(4)の取り組みを，学級・教師レベル，学年・教科レベル，そして学校レベルで構造化する。

## 4 研究の方法

以下に示す教育計画マトリックスと個人別資料一覧表を用いて，教育的援助ニーズの異なる児童生徒の学力向上を図った。

### (1) 教育計画マトリックス

教育計画マトリックス(EPM)の一般的な形式と構造を，表1に示した。横の欄は，実態をふまえての長期目標の設定と，それにいたる短期目標の設定，そしてそのための具体的取組の柱（ポイント）からなっている。

### (2) 個別資料一覧表

教育計画マトリックス(EPM)を作成する際に注意すべき点は，児童・生徒一人ひとりに関する資料の収集と整理である。個別の資料，すなわち個々人の実態，目標，成果をまとめて一覧表にしたものを個別資料一覧表と呼ぶことにする。

表1 教育計画マトリックス(Education Plan Matrix)

	内 容	指標 (具体的資料)	成果	条件 (外部・内部)
長期目標	学年末 (または学期末) に達成させたい事項	長期目標の内容を表す具体的な数値 (児童・生徒)	○か×	長期目標を達成させるために必要な学校内外の条件
短期目標	学期末 (または単元や取組みの区切り) で達成させたい事項	短期目標の内容を表す具体的な数値 (児童・生徒)	○か×	短期目標を達成させるために必要な学校内外の条件
取組み	目標達成にむけての取組みの柱	取組みの内容を表す具体的な数値 (主に指導者)	○か×	取組みを進めるために必要な学校内外の条件
実態	長期目標に関わる児童・生徒の実態, あるいは取組みの実態	実態を表す具体的な数値 (児童・生徒, 指導者)		実態に関係する学校内外の条件

表2 児童・生徒の個人別資料一覧表の例

児童	欠席日数 一学期 (実数)	欠席日数 二学期 (目標)	欠席日数 二学期 (実数)	算数学力絶対評価 一学期 (実数)	算数学力絶対評価 二学期 (目標)	算数学力絶対評価 二学期 (実数)	学級適応感 尺度得点 一学期 (実数)	学級適応感 尺度得点 二学期 (目標)	学級適応感 尺度得点 二学期 (実数)
A	12日	約5日	7日	B	A	A	6点	7点	8点
B	15日	約10日	11日	C	B	C	4点	6点	5点
C	2日	2日	1日	B	B	B	7点	8点	9点

(注: 学級適応感尺度の得点範囲を1点~10点と仮定する)

## 5 研究のまとめ

教育計画マトリックスは、目標や取組を具体的な指標 (達成率, テストの点数, 指導時間の回数など) を用いて表現する段階で学校側に苦勞が見られたが, 学校訪問時の説明や協議によって理解を深め, 実態に即した計画を立てることができた。目標と取組を明確化するという点で, 大いに有効であると考えられる。

個人別資料一覧表については, どの学校でも, 子どもの個別のデータを表に整理することに戸惑いがあり, 特に目標設定に関する理解の促進に時間を要した。目標設定が吟味されていないと, 取組が焦点化されず, 結果として目標達成も容易ではなくなる。この点が, 本研究での各研究協力校での目標の達成状況が一部, 満足できる状況にない原因の一つであると考えられる。

今回, 教育的援助ニーズに応えるという観点から, 教育計画マトリックスと個人別資料一覧表の有効性を確認することができた。今後, その導入と活用方法をさらに検討する必要があると考えられる。

## 6 教育実践報告

(注) 以下、学校ごとに実践の概要や成果・課題、および教育計画マトリックスを示すが、紙面の制限があり研究代表者の責任において編集を行なった。

### 実践報告(1): 福岡市立月隈小学校

学級数・児童数(取り組んだ学年): 3~6年の9学級300人

#### 1 取り組みの名称 「算数5ポイントアップ応援隊Ⅲ・Ⅳ」

#### 2 目的

- ①ステップアップ式の算数練習問題の個別指導を通し、算数の基礎基本の内容を確実に身につけさせる。
- ②児童に自信を持たせ、自ら進んで学ぼうとする態度を育成する。

#### 3 取り組みの内容

- ①学力向上委員会(TT委員会)における検討会
- ②算数5ポイント応援隊Ⅲ・Ⅳの実施計画
- ③ボランティアティチャー選定と招聘
- ④ボランティアティチャー学習会

#### 4 成果と課題

##### (1) 取り組みの成果等

- 平成18年度、平成19年度の取り組み共に、算数5ポイント応援隊で実施した学習では、どの学年も向上が見られ、特に、3年生の「かけ算」、4年生の「角」、5年生の「概数」、6年生の「百分率とグラフ」では、指導後のテストが指導前より大きな伸びが見られた。また、平成18年度CRT検査結果と平成18年度CRT検査結果の比較でも同様の結果が見られた。
- 平成18年度、平成19年度の児童の意識調査では、3、4年生の80%以上の児童、5・6年生の50%の児童が「つまずいているところができるようになった」と答え、算数に対する自信の高まりが見られ、取り組みの効果があらわれた。
- 児童一人一人の学習状況においても、平成18年度の初めの段階で、A評価児童(A児~E児)、B評価児童(F児~J児)、C評価児童(K児~O児)であった児童の多くが、指導後の変化、CRT検査結果の変化共に伸びが見られた。

##### (2) 今後の課題

- CRT学力検査結果をもとに、前学年の復習をする方がよいのか、現学年で単元の学習を終えた直後に定着を図るため行う方がよいのかも検討する必要がある。
- 今年度行った小領域で4年生の「角」のように当該学年の単元の学習直後に行った単元と6年生の「割合」「速さ」のように前学年で学習した内容を取り扱ったものがある。来年度へ向けて、全職員で検討する必要があると考える。
- これまで2年間、中・高学年を中心に「算数5ポイントアップ応援隊」に取り組んできたが、数の概念、問題の読みとりなど低学年のころからの積み重ねによるつまずきが見られるため、低学年にまで算数5ポイント応援隊の取り組みを広げる必要がある。



## 5 教育計画マトリックス

	内 容	指標（具体的資料）	成果	条件（外部・内部）
長期目標	<新年度初め> ・算数科の学力向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成19年4月に実施するCRT学力検査（算数）において、3年～6年の全国平均値との比較で、5点アップを図る。</li> <li>平成20年4月に実施するCRT学力検査（算数）において、3年～6年の全国平均値との比較で、5点アップを図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>3年, 前年度未実施</li> <li>4年 (+5, +5)</li> <li>5年 (-5, +14)</li> <li>6年 (+15, +25)</li> <li>未実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3年～6年のCRT学力検査（費用保護者負担）</li> </ul>
短期目標	<1月末> ①3年～6年児童に算数の基礎的な数概念を定着させる。 ②3年～6年児童の算数の基礎的な計算力を向上させる。 ③算数科の自ら学ぶ態度を身につけさせる。	①算数5ポイント応援隊Ⅲの取組後のテストを事前テストより5～10点アップさせる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・3年 - かけ算と筆算, 長さ・かさ</li> <li>・4年 - 角, 分数</li> <li>・5年 - 分数, がい数</li> <li>・6年 - 倍数・約数・約分・通分, 速さ</li> </ul> ②算数5ポイント応援隊Ⅳの取組後のテストを事前テストより5～10点アップさせる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・3年 - かけ算, 長さ・かさ, 時刻と時間</li> <li>・4年 - わり算, 角</li> <li>・5年 - がい数, 面積</li> <li>・6年 - 百分率とグラフ, 速さ</li> </ul> ③毎日の家庭学習を, 最低各学年×10分間, 自主的に行う。 （計算ドリル練習, 百桁計算）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>3年 (+8.6, +1.8)</li> <li>4年 (+25.2, +8.8)</li> <li>5年 (+13.6, +23.7)</li> <li>6年 (+7.8, +4.8)</li> <li>○</li> <li>3年 (+3.3, +7.0)</li> <li>4年 (+15.1, +6.0)</li> <li>5年 (+36.6, +16.4)</li> <li>6年 (+35.9, +18.2)</li> <li>○</li> <li>3年 (19人→25人)</li> <li>4年 (13人→34人)</li> <li>5年 (25人→28人)</li> <li>6年 (25人→33人)</li> </ul>	
取組み	<11月～1月> ①2, 3学期の学校裁量の時間を活用し, 算数5ポイントアップ応援隊の時間を確保する。 ①学力向上担当が, 児童の能力に合わせたステップアップ練習プリントを作成する。 ①計算練習や文章問題プリントに取り組みながら, 支援者がつまづいている児童の個別指導を行う。 ①担任, 学力向上委員会担当とVTが連携し, グループ別指導にあたる。 ②日常的な算数基礎学力向上の取り組みを行う。 ③学力向上連絡会を定例化し, 機能を高める。 ④保護者と連携して家庭学習の習慣化を図る。	①算数の基礎学力向上の時間として, 学校裁量の時間45分を5回を確保する。 ①1回の指導につき, 児童の能力に合わせたステップアップ式練習問題を5～6枚取り組ませる。 ①児童を習熟度別グループ4グループに分け, 担任と学力向上担当5名, 教務主任, VTの5人が習熟度グループ別の指導にあたる。 ①VTと実施前の打合せ20分, 実施後の反省会20分を行い, 指導の手だての確認, 児童の変容等を情報交換する。 ②帯時間（月限昼タイム 2:00～2:15）を使って升計算の取り組みを週15分2回行う。 ③週1回, 学力向上連絡会で課題にあった指導方法, 指導の手だて, 評価方法について検討する。 ④家庭学習予定表を立てさせ, 家庭学習状況を, 担任と保護者が, 毎日確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>○</li> </ul>	「事業経費」 ・ボランティアへの謝金 10,500円 （事業経費より） ・学力向上担当3名, 児童支援担当1名, 学習指導等支援補充1名, 教務主任とも協力体制をとる。
実態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・領域別に見ると, 4年生「量と測定」, 「図形」, 「数量関係」</li> <li>5年「数と計算」, 「量と測定」, 「図形」, 「数量関係」</li> <li>6年「数と計算」, 「量と測定」, 「図形」, 「数量関係」</li> </ul> に課題があり, 基礎的な学力の定着が必要である。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・観点別では, 特に, 5～6年の「数学的な考え方」に課題があり, 文章を読み取る力の育成が必要である。</li> </ul>	○平成18年4月のCRT学力検査（全国平均との比較） 3年の領域別では, I数と計算94, II量と測定99, III図形93 4年の領域別では, I数と計算92, II量と測定89, III図形89, IV数量関係86 5年の領域別では, I数と計算88, II量と測定78, III図形88, IV数量関係85 6年の領域別では, I数と計算89, II量と測定86, III図形87, IV数量関係89	/	

## 実践報告（２）：福岡市立南片江小学校

学級数・児童数（取り組んだ学年）：１～６年の１５学級４８８人

### １ 取り組みの名称 「学力向上パワーアップ（チャレンジタイム、のびっこ）」

### ２ 目的

- （１）学習の基礎・基本を身につけさせるために、補充学習を取り入れ、遅れがちな子の学力向上を図る。
- （２）児童の実態、進度差、習熟度、課題別に応じた少人数学習を取り入れ、遅れがちな子の学習の定着を図る。

### ３ 成果と課題

#### （１）取り組みの成果等

- 学期ごとに実施する「定着度テスト」により、漢字力と計算力における児童の学力の実態をはっきりと把握することができ、指導の充実に効果的であった。

「定着度テスト集計表」を作成し、数値化したことにより、各学級の児童の実態の把握が明確にされ、誰に・どのような方法で・どのような力を身につけさせればよいか目標が具体化され、指導の充実が図られた。

- 個に応じた学習が行えるよう、簡単な課題から難易度の高い課題まで復習プリントを作成したため、児童が自分の能力に応じた活動ができ、無理なく意欲的に学習を進めることができた。５・６年生では、１学級を少人数分割し、１グループを複数担当で支援することができ、指導の徹底につながった。

計算では、どの学年でも、学年の平均目標８０点に対し９０点と大きく上回ることができ、５９点以下の児童も目標４名に対し、２・６名と目標を達成することができた。

漢字でも、平均目標７０点に対し、８２点と目標を上回る成果を上げることができた。

- 昨年度導入の「チャレンジタイム」は完全に定着させることができた。毎日漢字スキルや計算ドリルを継続的にさせることにより、児童の漢字力・計算力が向上してきた。
- 毎朝実施の「読書タイム」や読み聞かせグループ「ダンボ」の活動により、読書を楽しむ児童の姿が増えてきた。図書室の利用者数も増え、１週間一人あたりの本の貸し出し量が０・４冊から０・６冊へと増えた。
- 「学力向上委員会」で「定着度テスト」の実施を行い、その結果の分析をもとに、「指導方法工夫改善委員会」が「のびっこタイム」の復習プリントを作成するなど、児童の学力向上に向けて、教職員の指導体制が整いつつある。



個人指導もできる「のびっこタイム」

#### （２）今後の課題

- さらに客観性のある「ＣＲＴ」等の導入も計画していきたい。
- 「定着度テスト」の５９点以下の児童に、漢字力を身につけさせる手立てを工夫する必要がある。
- ６年間を通したカリキュラムの作成に取り組みたい。
- 図書館の環境整備に努めたい。
- スクール・ボランティアの増員等、地域の支援体制の確立を図りたい。

#### 4 教育計画マトリックス

	内 容	指標（具体的資料）	成 果	条件（外部・内部）
長期目標	<p>&lt;3月末&gt; ①②③国語・算数科の学力向上 ①③漢字力、計算力のアップ</p>	<p>③C R T - IIでの算数計算力の学年平均を75点以上に する。 ①③定着度テストCの児童を各学年とも30%以下にする。 (a)</p>	<p>× (72)  ○ (28%) (23%)</p>	
短期目標	<p>&lt;12月末&gt; ①漢字の読み書きについて定着を図る。 ②読書に親しむ習慣をつける。 ③計算力の定着を図る。</p>	<p>①学期末に行う漢字のテストで60点以下を7名以下とし、平均を80点以上とする。 ②一人の読書量を1週間あたり1冊以上とする。 ③学期末の計算テストの60点以下を4名以下とし、平均を85点とする。</p>	<p>○ (82)  ○ (1. 2)  × (83)</p>	<p>①③学校独自の「学力定着度テスト」の準備。 ・一学期 ・二学期</p>
取り組み	<p>&lt;5月～2月&gt; ①③児童の学力定着の推移を個人ごと把握する。(d)  ①③漢字・計算の力を身につける時間を確保する。  ②読書の習慣がつくような時間の設定を行う。</p>	<p>①③全児童の個人カルテを作成し、記録と分析を行う。 (d) ①③毎日中休み後の15分間「チャレンジタイム」を実施し、漢字と計算力の基礎学力の定着を図る。 ③毎月1回の「のびっこタイム」を実施し、計算力の定着を図る。 ①③毎学期1回、本校独自の「学力定着度テスト」を行い、児童の実態を把握するとともに、指導に役立てる。 ②毎朝、10分間「読書タイム」を実施し、読書に親しむ時間を設定する。 ②毎週1回のP T A読み聞かせグループ「ダンボ」による、読み聞かせを行う。</p>	<p>○  ○  ○  ○  ○  ○</p>	<p>③支援サポーター2～3名をのびっこタイムに動員する。 ③形成的評価を行う。 *定着度テスト *C R T - II (c)  ②図書購入を行う。 ②読み聞かせグループ「ダンボ」との連携</p>
実態	<p>&lt;4月&gt; ①漢字や語句のつまづきがある児童が見られる。  ②読書量が少ない。  ③計算の基礎的な計算力が身につけておらず、問題が解けない子がいる。</p>	<p>①本年度の学力テストでは漢字の書き取り4年の平均63点、5年平均72点、6年58点であった。 ②図書館の貸し出し一週間あたり一人平均0.6冊であった。 ③前年度の学力テストでは計算力5年77.8(全国79.2)、6年70.1(全国73.9)で、全国平均より落ち込んでいる。</p>		<p>①パソコンでの収集  ②図書購入を行う。  ③計算機によるトレーニング</p>

## 実践報告（3）：福岡市立若久小学校

学級数・児童数（取り組んだ学年）：5～6年の6学級197人

### 1 取り組みの名称 「自然調査能力を育てる学力パワーアップ」

### 2 目的

- (1) 身の回りの環境問題や地球規模の環境問題などに関心を持ち、自然環境の美しさや不思議さについて感じ取り、自然と親しもうとする児童を育てる。
- (2) 課題意識を持ち、正確な情報を得られるよう地域の環境を調べたり、科学的な根拠に基づいて現状を分析したり、情報を集める手法を身に付けたり、問題解決能力を身に付けさせる。

### 3 成果と課題

#### (1) 取り組みの成果など

- 昨年の課題を受けて、評価項目の関連性を考え、自然調査能力別グループで目標点数を設定し、手だてを考えることができた。
- これまでの学習形態や調査方法の工夫により、総合的な学習の時間における自然調査能力の学習スタイルができ、カリキュラムの中に定着してきた。
- 5年生では、観察の視点を明確にした調査を行うことで、観察の視点が広がり、今まで気づかなかったことに気づき、日常生活にも、葉の形を見る、細かい部分まで見るなど動植物を見る目が生かされ、自然に対する関心を高めることができた。このことが、6年生の自分の課題をもって、生物調査に臨もうとする活動につながると考えられる。
- 6年生では一年間継続して観察することにより、植物の生命の神秘さやたくましさを感じ取ることができ、他の植物を見るときに転移した見方をしようとする子がでてきた。また、観察したデータの積み重ねがあるからこそ、一年間のまとめでは、調べてきたことを相互に関係付けたり、自分なりに判断したりすることもでき、自ら獲得した知識を得ることができたと考えられる。

#### (2) 今後の課題

- 評価項目の見取りについて教師相互の見方の共通理解をするための話し合いをしてきたが、評価基準を設ける必要があることが明らかになった。
- 児童が動植物のどこに着目したらよいのかがわかるような学習プリントの工夫をする必要があることが明らかになった。
- 5年生ではコース別によって観察の視点が異なることがあり、6年生での生物調査の視点到転移できていないことがあったため、コース別の評価基準と6年生での活動の関連を明らかにする必要がある。
- 6年生では、一つの植物をおっていくと、枯れたり刈り取られたりすることがあるので、一つの植物を通して環境を考えることができる課題の設定の仕方を明らかにする必要がある。



観察記録



冬の観察



#### 4 教育計画マトリックス

	内 容	指標（具体的資料）	成果	条件
長期 目 標	<p>〈3月末〉 ①5年生，②6年生ともに校区の自然調査を行わせ，小学校理科の基礎・基本の学力の一つと考えられる情報収集力，情報活用力，データ処理力，考察力などを身につけさせる。</p> <p>①5年生：研究のまとめの中に四季の変化，校区の環境の特徴をとらえ関係づけた考察が述べられるようにする。</p> <p>②6年生：研究のまとめの中に校区の環境要因と生物の特性，分布などの点から考察が述べられるようにする。</p>	<p>目標点数に対し 80%の子どもたちが到達できるようにする。</p> <p>① 5年生</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・植物コース・・・11点</li> <li>・水生コース・・・10点</li> <li>・土壌コース・・・11点</li> </ul> <p>②6年生</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Aコース・・・24点</li> <li>・Bコース・・・14点</li> <li>・Cコース・・・8点</li> </ul>	<p>△ (80%) (64%) (67%)</p> <p>× (25%) (40%) (41%)</p>	
短期 目 標	<p>〈12月末〉</p> <p>①5年生：生物の特徴をとらえる視点がわかり，進んで自然の生物を細部にわたって観察し，自分なりの考察を加えることができるようにする。</p> <p>②6年生：何を観察し，観察結果から得られた情報をどのように処理し，考察を加えたらよいかわかり，進んで得られた情報を再構成し，自分なりの考察を加えることができるようにする。</p>	<p>①5年生：観察力評価が全員9点以上とする。</p> <p>②6年生：観察力評価が全員18点以上とする。</p>	<p>△ (75%)</p> <p>× (10%)</p>	
取 り 組 み	<p>〈5月～2月〉</p> <p>① ②総合的な学習の時間に生物調査活動を四季に応じて年間に位置づける。</p>	<p>①5年生：植物調査コース，水生生物調査コース，土壌生物や昆虫調査コースにわかれ調査を行う。また他地域を調査し校区と比較する。</p> <p>② 6年生：興味のある生物について児童が一種類を選択し，一年間継続的にその変容を観察する。</p>	<p>○</p> <p>○</p>	専 門 家 の 招 聘
実 態	<p>〈4月〉（前年度末）</p> <p>①5年生は身の回りの生物に対する興味・関心が低い子が多い。</p> <p>②6年生は生物に対する興味・関心が高まってきたが，目的を持って観察する子が少ない。</p>	<p>①5年生は4年生までの理科の生物領域で80%の子が意欲的に学習できていた。が校区内の様子についてはよく知らない。</p> <p>③ 2年生は前年度90%の子が目標に到達できた。</p>		



## 実践報告（４）：福岡市立博多中学校

### 1 取り組みの名称 学力パワーアップ勉強会

学級数・生徒数（取り組んだ学年）：1～3年の抽出生徒37名

### 2 目的

- (1) 低学力生徒に対する支援を行い、基礎学力の定着をはかる。
- (2) 達成感や満足感を持たせることで、学習意欲を喚起させる。
- (3) 継続的な支援を通して、家庭学習の定着を育てる。

### 3 取り組みの概要

- (1) 学力パワーアップ確認テストを全学年で実施（7月は1回，2学期以降は毎週木曜日）
- (2) 各学年で採点し、誤答を分析表で確認。カルテで個人進捗を診断
- (3) 支援生徒に対する担当教員を付ける。
- (4) 各学年の数学・英語の学年状況を確認後、数学・英語科に提示し教材選定に入る。
- (5) 夏休み中に教材を購入。個人指導、学力支援(内容・計画・進め方を話す)を開始
- (6) 月末には、学力パワーアップ確認テストを行い、到達度を確認する。
- (7) 中間・期末考査では、テストカルテを用いてテスト支援も行う。
- (8) 支援サポーターと協力しながら、支援内容を各週で検討する。

### 4 成果と課題

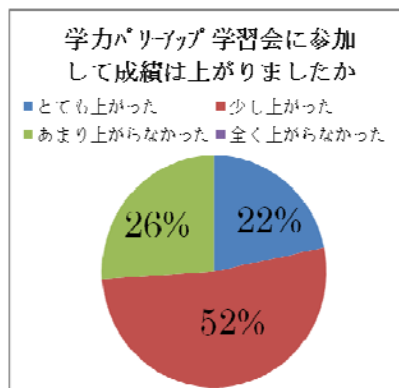
#### (1) 成果（抜粋）

- できるようになった生徒は自信を持ち、授業参加も意欲的になった。
- ほとんどの生徒が、前向きな姿勢で取り組んでいた。
- 自学ノート(1年生)を毎日提出し、自分のペースで取り組めた。
- 生徒がのびのびと学習している。
- 実施生徒の多くが授業中のノートを取るようになった。

月1回の確認テストで正解した項目に色を塗らせ、理解した項目を実感させる。

#### (2) 次年度に向けての改善点（抜粋）

- 週1回、外部講師の存続ができればよい。(費用面での問題)
- 参加する生徒の選び方を検討する必要がある。学習意欲の欠如やさぼったり、続かなかったりする生徒への取り組み。(低学力生徒で、非行傾向生徒への取り組み)
- 教職員への周知とやり方の共有化。
- 通年での指導ではなく、前期後期の2期制で生徒が選択し、ノートやプリント等作成する。
- 低学力生徒だけでなく、中から高学力生徒への支援につなげる。
- 残されているという劣等感を払拭する。
- テストや小テストの点数に表れる達成感と学習の満足感を感じさせる取り組み。



通算パワーアップ（数学）

学年	項目	達成	未達成	不明
1-1	1.1 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.2 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.3 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.4 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.5 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.6 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.7 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.8 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.9 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.10 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.11 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.12 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.13 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.14 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.15 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.16 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.17 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.18 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.19 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.20 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.21 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.22 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.23 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.24 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.25 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.26 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.27 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.28 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.29 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.30 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.31 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.32 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.33 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.34 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.35 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.36 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.37 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.38 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.39 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.40 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.41 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.42 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.43 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.44 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.45 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.46 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.47 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.48 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.49 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.50 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.51 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.52 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.53 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.54 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.55 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.56 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.57 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.58 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.59 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.60 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.61 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.62 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.63 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.64 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.65 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.66 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.67 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.68 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.69 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.70 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.71 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.72 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.73 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.74 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.75 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.76 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.77 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.78 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.79 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.80 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.81 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.82 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.83 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.84 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.85 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.86 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.87 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.88 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.89 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.90 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.91 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.92 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.93 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.94 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.95 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.96 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.97 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.98 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.99 数の性質	達成	未達成	不明
1-1	1.100 数の性質	達成	未達成	不明

## 5 教育計画マトリックス

	内 容	指標（具体的資料）	成 果	条件 (外部・内部)
長期目標	①目標に準拠した評価において、全教科の学力向上を図る。	①評定「1～2」の分布を20%以下、評定「4～5」の分布を30%以上にする。 ②観点別評価における「A」の分布を30%以上、「C」の分布を20%以下にする。	△([1～2]が25～28%、[4～5]39%～34%) △([A]が32%、[C]が24%)	・年度末、または次年度当初に学力検査を実施する。
短期目標	①知識・理解の能力を高め、基礎・基本の定着を図る。 ②家庭学習の定着を図り、学習意欲を喚起させる。	①単元や学期末における観点別評価で「A」の分布を30%以上、「C」の分布を20%以下にする。 ②家庭学習の実施率を、1時間以下20%、1時間以上50%にする。	△([A]が34%、[C]が25.5%)  ○70%が1時間以上最高4時間(支援生徒対象)	・定期教育相談(11月実施予定)との連携を図る。
取組	①英語・数学基礎力の向上。 (1学期) ・学力確認テスト (9月～2月) ・個人教材(プリント)学習 ・月末確認テスト 習熟度別学習や補充学習といった指導方法を工夫する。 ②個人カルテと学力支援カルテを用いて指導と評価を実践する。 ③家庭学習の定着を図る。 ④意識調査の結果を分析する。 ⑤教育相談との連携を図る。	①1 学期末考査の結果をもとに生徒を抽出する。 ・学力確認テストにより進捗を図る。 ・個人カルテを作成し、進捗にあった内容のプリントを学習する。 ・月末確認テストで進捗を確認する。 ②個人カルテや学力支援カルテにより、「B」や「C」の生徒に対して授業改善を行う。また、生徒の個別指導(月1時間程度)を行う。 ③学習会において、家庭学習用の宿題を提示、取り組ませる。 ④分析結果をもとに、各教科の授業改善ポイント(家庭学習を含む)をまとめ、8月初めの職員会で共有する。 ⑤定期教育相談(11月実施予定)で、家庭学習、①の指導方法への感想を相談の共通内容として取り上げる。	○  ○  ×1 学年のみ取組む ○  ×教育相談時間が確実に確保できなかった	・学習面に関わる小中連携を図る。
実態	①小学校の時に、「読み、書き、計算」のドリル学習を行ってきている。 ②学力の格差が大きく、基礎学力が十分身につけている生徒とそうでない生徒がいる。 ③家庭学習をしてこない生徒や提出物出さない生徒が30%程度いる。	①1 学期末考査から、各学年の学習内容について、大部分の教科で学年平均に達していない。 ②観点別評価において知識・理解や思考・判断に関わるものが、学年平均を下回っている。 ③家庭学習や基礎学力の定着ができていない。		